



発行日 2025. 3. 1
発行者 渡辺 真樹
発行所 一般社団法人
群馬県理学療法士協会事務局
群馬県前橋市大渡町 1-10-7
群馬県公社総合ビル 6F
源流題字 浅香 満
編集責任者 榊原 清

源流

No. 161 Contents

■第 31 回群馬県理学療法士学会を終えて 大会長 佐藤豊 準備委員長 横山雅人	・・・	02
■理学療法アラカルト「子供の参加に関して考える」 古田島佳世	・・・	03
■ワークライフバランスを考える 「ワークライフバランスの実現に向けた取り組みの紹介」	・・・	04
■書籍紹介 「脳卒中片麻痺者に対する歩行リハビリテーション」 鈴木堯之	・・・	05
■職場紹介 「訪問看護ステーションのびしろ太田」 茂木草介	・・・	06
■後輩理学療法士へ 赤石憲哉	・・・	07
■スポーツ推進部 研修報告 平石卓朗	・・・	08
■スポーツ推進部 研修報告 齊藤竜太	・・・	09
■第 31 回群馬県理学療法士学会開催 ■第 52 回基礎講座・症例検討会開催	・・・	10
■令和 6 年度地域リハビリ推進部研修会開催 ■令和 6 年度介護保険部主催研修会開催	・・・	11
■第 53 回基礎講座・症例検討会開催 ■令和 6 年度地域局小児リハ部研修会開催	・・・	12
■令和 6 年度東毛ブロック施設間連絡会開催		
■会員動向 ■ニュース收受 ■編集後記	・・・	13

第31回群馬県理学療法士学会 開催

「第31回群馬県理学療法士学会 in 太田 を終えて」

大会長 日新病院 リハビリテーション科 佐藤 豊

令和6年10月27日(日) 太田医療技術専門学校を会場に第31回群馬県理学療法士学会が開催されました。学会テーマは「衣鉢相伝(いはつそうでん) ~技能(ワザ)の伝承~」を掲げ、臨床推論学的思考過程や技能を磨く重要性について再考する機会になればと思い、テーマを選定しました。臨床において非常に重要なテーマですが、かたちにすることがとても難しく、講師の先生方にはご苦労いただきましたが、どのセッションも会場が一杯となりホッとしました。



一般演題は、46演題と多くのご登録をいただきました。ポスター発表は、コロナ後、久々の開催でしたが、積極的な意見交換が行われ、改めて対面開催の意義を痛感しました。

参加者は、当日参加者を含めて352名と、県学会史上初の300人台となり、新たな歴史を作り上げることができたと思います。働き方の多様性を考慮し、お子さまと一緒に参加できるキッズルームを新設し、7組のご家族に利用していただいたことも一定の成果であったと思います。

最後に約1年半、企画立案から当日の運営まで二人三脚で頑張ってくれた準備委員長はじめ準備委員の皆様、当日運営スタッフならびに関係者の皆様方に御礼申し上げます。第32回大会もより盛大に行われることを祈念いたします。

準備委員長 太田医療技術専門学校 理学療法学科 横山 雅人

第31回群馬県理学療法士学会の準備委員長として、無事に学会を成功裏に終えることができたことに感謝申し上げます。本学会では、多くの演題発表やディスカッションを通じて、理学療法の新たな知見や臨床での応用可能性を共有する場となりました。また、多くの参加者から活発な意見交換が行われ、学びの多い場を提供できたと感じています。学会の準備にあたり、多くの課題もありましたが、委員の皆様や関係者のご協力によりスムーズに進行することができました。特にオンラインと対面のハイブリッド形式を取り入れ、キッズルームの運用により多様な参加者のニーズに応えることができた点を成果と捉えています。一方で、さらなる運営の効率化や、参加者満足度向上のための課題も見えました。最後に、ご参加いただいた皆様、協力いただいた全ての関係者に改めて御礼申し上げるとともに、今後も本学会が群馬県の理学療法士にとって有益な場であり続けるよう、努力を続けて参りたいと思います。

理学療法アラカルト

「子供の参加に関して考える」

群馬大学医学部附属病院 リハビリテーション部

古田島 佳世



先日参加した日本小児理学療法学会学術大会にて興味深い話題がありましたので、共有させて頂きたいと思っております。

今回のテーマとしている「参加」という概念について、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。「参加」はICF（国際生活機能分類）の領域の1つとして「生活や人生場面（life situation）への関わり」と定義されており、多くの方に馴染み深い概念だと思っております。

さらに小児領域では、カナダのRosembaum博士が提唱したF-wordという新しい概念が注目されています。このF-wordはICFの枠組みを基に、小児領域で重要と考えられる以下の6項目を加えたものです：Functioning（機能）、Family（家族）、Fitness（体力）、Fun（楽しみ）、Friend（友情）、そしてFuture（未来）。この中でも、「Friend」が「参加」に該当するとされており、同年代の子供たちとの友情や、社会的な発達の重要性が強調されています。

では、具体的に「参加」とはどのようなものを指すのでしょうか。例えば、学校へ通うこと、デイサービスの利用、地域のスポーツ活動への参加など、様々な活動が挙げられます。これに加えて、学校でどのような役割を担っているのか、友達とどのような関わり方をしているのか、積極的に取り組むことができているのか・・・等、質的な側面の評価が重要です。特に障害や困難を抱える子供たちが、楽しさや喜びを感じながら生き生きと参加するためには、その環境や支援体制も重要となります。担当PTとして、一支援者として、具体的な状況を把握することも必要であると感じています。

一方で、参加に関する評価指標はまだ確立されておらず、日本語訳された指標も十分ではないと言われております。近年、高木氏によりPEM-CY（Participation and Environment Measure for Children and Youth）が日本語訳され、その信頼性と妥当性が報告されました。PEM-CYは、家庭・学校・地域のそれぞれの場面における参加について、頻度・関与度・保護者の希望を評価する質問紙です。また、それぞれの場面での環境要因についても評価することができる構成となっています。

参加に関する研究や実践は、今後の発展が期待される分野かと思っております。私自身、まだまだ学び始めたばかりですが、皆様にも興味をもって頂けるきっかけとなれば幸いです。

●参考文献

- 1) 高木健志、他：運動機能制限を抱える自動における日本語版 Participation and environment measure for children and youth の信頼性と妥当性の検討、The Journal of Japan Academy of Health Sciences、2022、p263～269

「ワークライフバランスの実現に向けた取り組みの紹介」

ワークライフバランス部 原 耕介

近年、医療現場では職員のワークライフバランスの確保が重要視されており、理学療法士もその対象となっています。職員が健康で充実した生活を送ることは、患者さんへの質の高い医療提供にもつながります。本稿では、理学療法士が実践しやすい施策を紹介します。

まず、残業の適正管理が求められます。急患対応などで残業が発生することもあります。サービス残業にならないよう適切に管理し、業務の優先順位を明確にすることが重要です。日頃から業務の優先度を部署内で明確にし、書類作成などは計画的に進めることで時間の有効活用が可能です。また、複数担当制を導入することで、急な欠勤時の対応がしやすくなり、特定の職員に業務が集中することを防ぐことで、業務の効率化が図れます。

次に、業務の効率化です。リハビリ記録やサマリーのテンプレート化により、負担を軽減できます。また、個別の記録については、記載方法の標準化を進めることで業務の簡素化を図ることができます。さらに、定期的に業務フローを見直すことで、不要な手続きの削減や業務の整理を行うことが有効です。効率的な業務運用を実現するためには、職員間で情報を共有し、業務の進捗状況を把握する仕組みを整えることも大切です。

休憩時間の確保も重要です。適切な休憩を取ることで集中力が向上し、業務効率が改善されます。休憩を怠ると疲労が蓄積し、注意力の低下やミスの増加につながるため、十分な休息をとることが求められます。職員が安心して休憩を取れるよう、休憩時間の確保を職場全体で意識することが重要です。業務が立て込むと休憩が後回しになりがちですが、短時間でも定期的な休憩を設けることで、集中力を持続させ、より良いパフォーマンスを発揮できる環境を作ることができます。

また、管理職と一般職の関わり方も大切です。日常的に職員の様子を把握し、一人ひとりとこまめにコミュニケーションを取ることで、職員が安心して相談できる環境を整えることが重要です。適切なサポートを行うためにも、業務の進捗や負担状況を共有し、職員が抱える課題に早期に気付くことが求められます。定期的な面談や情報共有を通じて、信頼関係を築くことが、働きやすい職場環境の維持につながります。また、こうした環境が整うことで、職員のモチベーション向上や精神的な負担の軽減にも寄与します。

最後に、キャリア形成支援についてです。業務時間内で研修機会を設けることが重要であり、短時間の研修を業務の一環として実施することで、職員の負担を軽減しながらスキル向上を図ることができます。なお、時間外の研修は、eラーニングやオンデマンド研修を活用することで、各自のペースで学習できる環境を整えることも検討してみても良いかもしれません。また、制度設計には大変な苦勞があるかもしれませんが、キャリアラダーの導入も有用であり、職員が自身の成長過程を明確に把握でき、モチベーション向上にもつながります。キャリアラダーを活用することで、職員が今後の成長に向けた道筋を理解し、専門性を高めながらキャリアを積み重ねることが可能となります。

これらの施策は一例ではありますが、各施設の実情に応じて柔軟に取り入れ、職員の負担軽減と専門性の向上を目指す際の参考にしていただければ幸いです。

*****書籍紹介*****



『脳卒中片麻痺者に対する 歩行リハビリテーション』

著者名：阿部浩明、大畑光司

出版社：メジカルビュー社

価 格：¥5,500 円

脳血管研究所 美原記念病院 鈴木 堯之

今回ご紹介する書籍は、2016年に発売された「脳卒中片麻痺者に対する歩行リハビリテーション」です。本書は、脳卒中片麻痺者の歩行リハビリテーションについて、基礎から臨床実践まで幅広く解説しており、臨床現場での実践に役立つ情報がわかりやすくまとめられています。

本書の魅力は、まず歩行の基礎について丁寧に説明している点です。歩行に関する神経学的・運動学的な知識はもちろん、脳卒中が歩行にどのような影響を及ぼすのかを分かりやすく解説しており、神経システムやバイオメカニクスの視点から、さらに歩行の理解を深めることができます。歩行のメカニズムをしっかりと押さえることで、よりの確な評価とアプローチが可能になると感じました。

また、本書では、病期に応じたトレーニング方法についても詳しく述べられています。急性期、回復期、生活期といった各フェーズにおける歩行リハのポイントが整理されており、それぞれのフェーズにおいてどのような介入が必要となるかの目安となります。臨床現場において、対象者の状態に応じた最適なりハビリテーションを提供するための指針として活用できると感じました。

さらに、本書の最後では、先進的なトレーニング方法についても触れられています。従来行われてきた標準的な介入方法だけでなく、近年報告が増えているニューロモデュレーションやロボット技術を活用したリハについても紹介されています。最新の知見を取り入れながら、より効果的な歩行リハを実践するための知見を得ることができます。

私自身、理学療法士として脳卒中片麻痺者の歩行リハに関わり始めた際に、「どこから学んでよいかわからない」、「何を評価すべきかわからない」、「トレーニングの目的がうまく説明できない」といった悩みを抱えることがありました。本書は、基礎から臨床実践までわかりやすくまとめられており、当時感じていた不安を解消し、知識と技術をもってリハビリに取り組むためのきっかけを与えてくれたと感じています。脳卒中者の歩行リハについて実践的な知識を身につけたい理学療法士の方々にとって、非常に参考になる一冊であると思います。ぜひ手に取ってみてください。



職場紹介

訪問看護ステーションのびしろ太田

茂木 草介

訪問看護ステーションのびしろ太田は2022年に太田市に開設された事業所です。当事業所は退院直後からお見取りまで幅広く訪問看護ニーズに応え、地域の在宅医療インフラになることをビジョンに事業を推進しています。現在、看護師が10名、PT3名、OT2名が在籍しています。

我々の近隣地域でも在宅療養が進んでおり、退院直後や終末期など、クリティカルケアを必要とする訪問がいっそう増えている印象です。そのようなケースでは昼夜問わず即時柔軟な対応が求められるため、事業所としては体力、対応力が求められます。そこで当事業所は訪問事業所ながら緊密なチーム体制をとり、複数スタッフで1人の対象者に対応できるようにすることで訪問体制の強化、スタッフの負担軽減をはかっています。

実際のところ、看護師が主体の訪問看護領域で理学療法士が活躍するには看護師との連携が必須で、コミュニケーションの円滑化、チームマネジメント能力などが鍵になると思います。逆に、事業所にとってはそのような能力は管理業務に繋がるため、理学療法士スタッフが管理で期待される傾向がある印象です。訪問看護は理学療法士の活躍の場が十分にある領域だと身をもって感じています。

ところで、当事業所にはワークライフバランスにおいて「副業推奨」という特徴的な取り組みがあります。これは代表の方針で、個人事業での活躍が訪問看護スタッフとして向上につながるという考えによります。

ワークライフバランスというと、残業を減らして余暇の時間を確保し、仕事もプライベートも充実するという発想が一般的かと思われそうですが、当事業所では「個人事業（ワーク）を尊重すると本業（ワーク）も充実し、結果ライフ全体が充実する」と捉えています。もちろん、個人事業をしていないスタッフもあり、割合は半々といったところですが、当事業所では残業がゼロに近い運営であり、自分の時間の使い方として個人事業を行う人は会社としてサポートしています。結果として個人事業での経験が本業の医療専門職業務のパフォーマンス向上に繋がる例もあり、事業所とスタッフの相互利益になっていると思われそうです。

引き続き太田市近隣の在宅医療インフラとして地域社会を支える一端となれるよう、事業所一丸となっていっそう向上していきます。



後輩理学療法士へ

脳血管研究所 美原記念病院

赤石 憲哉



皆さん、はじめまして。私は伊勢崎市にある脳血管研究所美原記念病院で、理学療法士として勤務している赤石憲哉と申します。入職してから現在まで、回復期リハビリテーション病棟に所属しています。私自身まだまだ未熟者ではありますが、自身の経験から感じたことを皆さんにアドバイスできればと思います。

当院では4月に入職してからの約1カ月間、先輩方の見学または共同参加といった形で臨床の様子を学ぶ機会がありました。あっという間に1カ月は過ぎ、私も患者様を担当することになりました。当時は、「この治療はこの患者様に合っているのか?」、「先輩がリハビリすればもっと良くなったのでは?」と自分の介入に自信が持てず不安に感じていました。きっと私と同じように悩み、不安に感じている方も多いのではないのでしょうか。ですが、そのような時こそ身近な先輩方に頼り、相談するのが一番良いと思います。先輩方はそれぞれ積み重ねた経験や技術、知識、患者様への関わり方など、自分には持っていないものをたくさん持っているはずで、その中で、良いと思ったことを真似してみてください。

時には、文献なども参考にすることはありますが、私は今でも分からない事があれば先輩方に相談しています。まずは、積極的にコミュニケーションを取ることが大事だと思います。今後も同じ理学療法士として共に頑張っていきましょう。

今回は、このような機会をいただきありがとうございました。

スポーツ推進部 研修報告

「第32回 JOC ジュニア・オリンピック・カップ・フェンシング大会

に救護スタッフとして参加して」 群馬医療福祉大学 平石 卓朗

2025年1月9日～12日の4日間、「第32回 JOC ジュニア・オリンピック・カップ・フェンシング大会兼 2025年世界ジュニア・カデ・フェンシング選手権大会選考会」が開催され、救護スタッフとして参加しました。本大会は、カデの部（17歳未満）とジュニアの部（20歳未満）のカテゴリー別に、2025年世界ジュニア・カデ・フェンシング選手権大会の選考及び、その他の海外遠征試合等の選考を兼ねている大会です。フェンシングは、剣で攻撃する有効面の位置で、フルーレ、エペ、サーブルという3種目に分かれており、種目ごとに特色があります。中でも、サーブルは選手の剣や身体が激しく衝突することが多く、スポーツ外傷の多い種目です。

これまで、サッカーを中心に県内のメディカルサポートに参加しており、国際大会の代表選考会を兼ねている主要な大会に、救護スタッフとして参加することは初めての経験でした。カデ・ジュニアの代表クラスの選手をサポートする好機であり、自身の経験や知識が選手の役に立つのではないかと思い、参加させていただきました。大会は高崎アリーナで開催され、会場内には選手やチームスタッフ、日本フェンシング協会関係者（運営・審判）など、多くの人で溢れていました。メインアリーナ内には競技会場が18ピスト設置されており、種目ごとに試合が同時進行していました。選手が床を蹴る音や剣がぶつかる音、ポイントが入った時のスタンドからの歓声など、会場内は緊張感と熱気に包まれていました。

日本フェンシング協会派遣のスポーツドクターが1名、アスレティックトレーナーまたは理学療法士が1名、群馬県理学療法士協会派遣の理学療法士2名の各日計4名の救護チームで大会運営をサポートさせていただきました。救護ブースは試合会場が一望できるメインアリーナに設置されており、AED、車いす、簡易ベッドが1台ずつ用意されていました。細かな物品としてはテーピング各種、止血用の包帯や滅菌ガーゼ等に加え、アイシング用の氷を準備し、救急対応に備えました。試合開始前に審判団との打ち合わせに同席し、メディカル対応について情報の共有を行いました。試合開始直後から、接触による外傷や打撲をはじめ、筋痙攣や捻挫などの対応に追われました。止血やテーピング、アイシングやストレッチ指導など、対応は多岐にわたり、試合中であれば定められた時間内（Injury time）で応急処置をしなければなりません。現場では、即時に状況判断を行い、適切な評価・治療を選択する必要があるため、いかなる事象にも対応できる準備が不可欠であると感じています。今回は、スポーツドクターによる初期評価後に応急処置を行う流れであったため、メディカルチームとして選手の治療に対して共通の認識を持つことができたのではないかと感じています。スポーツ現場に限ったことではありませんが、メディカルチームの一員として、選手やスタッフとコミュニケーションをとりながら連携を密に図ることが、質の高いサポートを提供する上で、必要不可欠であると強く感じました。

今回、救護スタッフとして選手に関わらせていただいたことで、理学療法士としてスポーツに携わる意義を再認識しました。また、眼前で繰り広げられる迫力ある攻防に圧倒され、フェンシングの魅力に触れる貴重な機会となりました。今回に限らず、スポーツの現場で選手に関わるたびに、自身の知識や技術の未熟さを痛感しています。その反面、自身の知識や技術が選手の役に立ち、サポートできる喜びを直に感じるができることが魅力だと感じています。私自身、普段からスポーツ現場に関わっているわけではありませんが、挑戦の意味も込めて今回の参加に踏み切りました。当日を迎えるまで、緊張や不安のある中で、挑戦するための準備は入念に行って臨みました。結果的に、反省点もありますが、貴重な経験を得ることができ、自身の財産になったと感じています。この経験を糧に、選手を陰で支えることのできる理学療法士に近づけるよう、挑戦を恐れず、研鑽を重ねていきたいと思っております。

結びに、本大会において充実した環境で、理学療法士として貴重な機会を与えてくださった日本フェンシング協会様ならびに関係各所の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

「2024 男子フルーレ高円宮杯フェンシングワールドカップに帯同して」

JCHO 群馬中央病院 齊藤 竜太

今回、群馬県理学療法士協会スポーツ推進部からの募集案内を受け、2024年12月6日(金)から8日(日)に開催された「フェンシング男子フルーレ高円宮杯」に救護スタッフとして参加させていただきました。各国の代表選手が集まる舞台上で理学療法士として貴重な経験をさせていただきましたのでご報告いたします。

会場である高崎アリーナに世界各国 200 名以上の選手が集まり、大会は全3日間にわたり開催されました。群馬県理学療法士協会からは各日程 2 名ずつの理学療法士が派遣され、東前橋整形外科病院の吉田竜敏先生、中尾藍稀先生と私の 3 名で全3日間を分担して帯同しました。また、日本フェンシング協会派遣の医師が 1 名、理学療法士が 1~2 名で加えた計 4~5 名の救護チームで大会運営をサポートさせていただきました。

私自身は地域のサッカー選手に関わることも多いのですが、今回は国際大会かつ私がサポートした経験がないフェンシング競技の選手へのサポートということもあり、程よい緊張感と高揚感を抱きながら会場入りしました。当日会場入後、フェンシングの競技ルールや会場での決まりごとを教えてもらいつつ、救護ブースの物品確認と競技会場の環境確認を行いました。救護ブースにはテーピング各種、止血用の包帯や滅菌ガーゼ等救急対応に必要な物品が一式用意されており、AED もブース内に 1 台常備されていました。メインアリーナ内には計 13 ヶ所のピストと呼ばれる競技会場が設置されており、同時に複数のピストで試合が行われていました。救護ブースはアリーナ内に設置されており、複数名の救護スタッフが配置されているため、大会期間中は選手がいつでもアイシング用の氷をもらいに来たり救護対応を受けられたりできるようなサポート環境が整っていました。

アイシング用の氷を購入し、サポートの準備が整ってすぐに選手が続々と救護ブースに訪れ始め、選手対応が始まりました。主な対応内容は、救護ブースでの「試合前及び試合後対応」、ピスト内での「試合中対応」でした。

「試合前及び試合後対応」は、試合前のテーピング対応や試合間のインターバル中の止血等の救急対応が主な対応となります。テーピング対応は剣の操作を行う肩関節や手関節、素早く激しいステップを行うために生じる足関節捻挫に対する制動テーピングもありました。止血等の救急対応については、剣や相手選手との接触に伴う擦過傷や手指の血腫、打撲等の対応が多かったです。「試合中対応」は基本的には医師の申請した 5 分間の Injury time 内での対応となります。この 5 分間は医師の申請から試合復帰までの総時間と規定されているので、足関節捻挫発生時の対応の場合、この時間内で評価から試合続行可否の判断→テーピング等施行→競技再開可能な状態まで復帰させる必要があるため迅速な対応が必要となります。評価から実技までのスピード感はもちろん選手やチームスタッフとのコミュニケーションも重要になると感じました。様々な対応がありましたが医師と理学療法士のチームで協働して、選手が競技に集中するための支援が行えたと感じております。

私は2日間帯同させていただきましたが、刺激的であつという間に終わってしまったというのが率直な感想です。これまで病院の臨床業務や地域のスポーツ現場で培ってきた技術や経験が、国際大会のような大きな舞台でも活かすことができたかなと思っております。細かく振り返っていくと、もっと思った通りに英語を話せれば、迅速に的確な評価が行えれば、より多くのテーピングの種類を知っていれば、と悔しい気持ちも多々ありますがこの気持ちは次の活動に繋げたいと思います。

全体を通じて、選手たちの礼儀正しさも印象的でしたし、ダイナミックかつ瞬時に繰り広げられる動作の応酬を実際に会場で体験することによって、フェンシングというスポーツの魅力に気づくことができました。やはりスポーツは素晴らしい、と思うと同時に今後も自分の好きなスポーツ現場で選手の力になれるよう理学療法士として自己研鑽に努めたいと思いました。

最後になりますが、今回このような素晴らしい環境で理学療法士として活動させていただく機会を与えてくださり日本フェンシング協会様ならびに関係各所の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

研修会報告

第31回群馬県理学療法士学会 開催

令和6年10月27日（日）、太田医療技術専門学校を会場に、第31回群馬県理学療法士学会が「衣鉢相伝～技能(ワザ)の伝承～」をテーマに開催されました。大会長は日新病院の佐藤豊先生、準備委員長は太田医療技術専門学校の横山雅人先生が務められました。完全対面で開催された今回の学会は、多岐にわたる講演や口述演題、今回より再開となったポスター発表と事前登録者が過去最多の、盛大な大会となりました。学会参加を通して、多くの先生方から技能(ワザ)を教えて頂き、非常に勉強になるとともに、自分自身の理学療法について考える非常に良い機会をいただきました。開催にあたり、運営に携わられた先生方に感謝申し上げます。

（わかば病院 小野友也）



※詳細な学会の様子は、群馬県理学療法士協会ホームページ (<https://gunma-pt.com/?p=14548>) をご覧ください。

第52回基礎講座・症例検討会 開催

令和6年11月10日（日）に群馬大学昭和キャンパスにて、第52回基礎講座・症例検討会が開催されました。はじめに基礎講座では、関西医科大学の野添匡史先生に「脳卒中者の予後予測と理学療法」というテーマでご講義いただきました。後の症例検討会では、老年病研究所附属病院の千須和真幸先生からは「病態理解に基づく予後予測と治療アプローチの決定～脳出血を既往に持つ延髄外側梗塞の一例～」、群馬大学医学部附属病院の荻原晃先生からは「上肢の反応に着目して治療を選択し、機能改善を図った中心後回脳梗塞の症例～急性期病院での短期間の介入～」、前橋赤十字病院の秋山裕樹先生からは「多疾患併存のある脳卒中例に対する急性期理学療法と下肢機能・歩行の予後予測」、公立藤岡総合病院の佃康誠先生からは



「画像所見を踏まえて予後予測と介入を検討した視床出血の一例～回復期リハビリテーション病棟での介入～」というテーマで、それぞれご講義いただきました。講義や症例検討会を通して、脳卒中者の予後予測に基づく理学療法介入の重要性を改めて感じる良い機会となりました。

令和6年度地域リハビリ推進部研修会 開催

令和6年11月17日（日）にオンライン形式にて、令和6年度地域リハビリ推進部研修会が開催されました。在宅りハビリ研究所の吉良健司先生に「活動・参加につなげる生活期リハビリテーション～結果にコミットするストレングスリハビリテーション～」というテーマでご講義いただきました。生活期でのリハビリテーションの課題に対して、対象者の心理・社会的視点を踏まえたリハビリテーションの重要性について学ぶことができ、自身のアイデンティティを再確認する非常に良い機会となりました。

令和6年度介護保険部主催研修会 開催

令和6年12月4日（水）にオンライン形式にて、令和6年度介護保険部主催研修会が開催されました。老年病研究所附属病院の牧雄介先生と介護老人保健施設ビハーラ寿苑の岩崎宏紀先生からは「地域リハビリの扉の開け方～前橋市と進める通いの場支援～」、公立七日市病院の高橋茂先生からは「富岡甘楽地域での介護予防事業について」、公立富岡総合病院の瀧澤瞳先生からは「甘楽地域における転倒・フレイル予防の実際」というテーマで、それぞれご講義いただきました。ご講義を通して、社会参加の視点をもった理学療法介入の重要性の高さを感じ、病院内だけでなく「地域のため」のリハビリを行う専門職として理学療法士が活躍できるということを改めて実感しました。

第53回基礎講座・症例検討会 開催

令和6年12月8日(日)に群馬大学昭和キャンパスにて、第53回基礎講座・症例検討会が開催されました。はじめに基礎講座では、名古屋学院大学の石垣智也先生に「理学療法における退院支援」というテーマでご講義いただきました。後の症例検討会では、日高リハビリテーション病院の春日壮晃先生からは「回復期入院日より早期自宅退院を見据えて退院支援の共働を進めた虚弱高齢者に対する介入事例」、みんなのかりつけ訪問看護ステーション前橋あずまの金子早奈江先生からは「在宅側から自宅退院を支援した独居の一症例」、公立七日市病院の大角梢先生からは「脳性麻痺の既往を有し脳出血を発症した症例～在宅復帰に向けた取り組み～」、前橋協立病院の真原豊先生からは「腕神経叢麻痺を呈した60歳代女性への退院支援」というテーマで、それぞれご講義いただきました。ご講義を通して、各病期におけるコアアウトカムの重要性や、退院支援は各病期により様々な方法が取られることから、多くの視点を持つことが重要性であることを学びました。



令和6年度地域局小児リハ部研修会 開催

令和7年1月19日(日)に群馬大学昭和キャンパスにて、令和6年度地域局小児リハ部研修会が開催されました。群馬県立小児医療センターの代美穂先生、群馬大学医学部附属病院の風間大輔先生、療育センターきぼうの岡部泰久先生から「装具・補装具の作成について～各種医療機関ではたらきかけ～」というテーマで、それぞれご講義いただきました。症例紹介を通して、各先生方の所属機関における装具・補装具作成の方法や工夫点をお話いただき、小児分野での装具・補装具作成をどのように進めていけばよいのかについて学習する良い機会となりました。



令和6年度東毛ブロック施設間連絡会 開催

令和7年1月24日(金)にリハセンターR-studioにて、令和6年度東毛ブロック施設間連絡会が開催されました。堀江病院の丸山広樹先生はスポーツトレーナーについて、太田医療技術専門学校の大谷知浩先生からは教員について、リハセンターR-studioの大澤宏貴先生からは起業について、それぞれキャリアデザインをテーマにご講義いただきました。各先生方のこれまでのキャリアについてお話いただき、理学療法士としての活躍の場の広さを感じ、自身のキャリアデザインについて考える良い機会となりました。

会員動向

令和7年2月26日現在

会員数 2,064 名、休会数 404 名、新入会数 2 名、施設数 414

ニュース收受

2024/11/15	第 44 回 年報	公益社団法人群馬県スポーツ協会
2024/11/19	年報ひたちの	茨城県理学療法士会
2024/11/22	群馬県言語聴覚士会ニュース 77 号	群馬県言語聴覚士会
2024/12/3	群馬県医師会報 No. 916	群馬県医師会
2024/12/4	兵庫県理学療法士会 士会だより No. 205	兵庫県理学療法士会
2024/12/20	群難連 新刊 92 号	群馬難病団体連絡協議会
2025/1/6	群馬県医師会報 No. 917	群馬県医師会
2025/1/6	和歌山県理学療法士協会ニュース No. 103	和歌山県理学療法士協会
2025/1/6	北海道理学療法士会誌 Vol. 41	北海道理学療法士会
2025/1/6	ケアマネ群馬 No. 136	群馬県介護支援専門員協会
2025/1/6	大阪府理学療法士会ニュースのデジタル配信 第 307 号	大阪府理学療法士会
2025/1/6	JPTA NEWS Vol. 352	日本理学療法士協会
2025/1/27	理学療法兵庫 No. 30	兵庫県理学療法士会
2025/1/27	会報群臨技 486 号	群馬県臨床検査技師会
2025/1/28	茨城県理学療法士会 インフォメーション No. 186	茨城県理学療法士会
2025/1/29	秋田県理学療法士会ニュース第 215 号	秋田県理学療法士会
2025/1/30	群馬県医師会報 No. 918	群馬県医師会
2025/2/3	群馬県作業療法士会ニュース「からっ風通信」第 159 号	群馬県作業療法士会
2025/2/4	HPTA NEWS One step No. 280	広島県理学療法士会

編集後記

2025 年になり、寒い日が続いておりますが、皆さんの体調はいかがでしょう。源流の作成に際して、原稿依頼を快く引き受けてくださった先生方、ならびに研修会報告を作成いただいた先生方には、心より御礼申し上げます。源流の作成や研修会の取材を通して、沢山の学びを得ることができました。今後も、継続して研修会への参加をしていきたいと思っております。

鈴木 堯之